

平成 30 年度

1 自己評価及び外部評価結果

事業所名 : グループホームゆうゆう八木沢

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0390200228		
法人名	合同会社ライフサポート・ゆうゆう		
事業所名	グループホームゆうゆう八木沢		
所在地	宮古市八木沢第5地割85番地1		
自己評価作成日	平成30年11月1日	評価結果市町村受理日	平成31年3月20日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai.gokensaku.mhl.w.go.jp/03/1/ndex.php?act=on_kouhyou_detail_2018_022_kani=true&ji_gyosyoCd=0390200228-00&PrEfCd=03&VerSiOnCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通二丁目4番16号
訪問調査日	平成30年11月30日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

事業所の『その人の歴史と尊厳、つながりを大切に寄り添い見守ります』という介護理念そのままに、ご利用者が長い人生で培った能力を活かせる場面をつくり、生き生きと暮らしていただいています。

事業所は地域住民の交流の場となる農村センターとバス停のそばにあり、利用者の皆さんが日向ぼっこや散歩をした際に気軽に声をかけあえる環境となっています。

今年度は、初めて『ゆうゆうまつり』と称するイベントを開催し、法人で行っている各事業の利用者やその家族、地域住民の方との交流の機会を持ちました。その中で、寸劇とクイズで認知症のケアについて考えていただいた。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

同一法人のデイサービスが隣接する開設4年目の事業所である。かつては畑が広がる田園地帯であったが、東日本大震災後に復興住宅などが建ち、住民が増えている。2年前に理念を見直し、利用者の尊厳に配慮し、寄り添い見守るケアに徹している。毎月開催される地区交流会に参加しており、近隣住民、小学生、中学生、ボランティアなどとの交流が活発で、秋に行った「ゆうゆう祭り」に多くの参加者が訪れた。認知症情報やケアについて発信し、相談も受けている。来年度、市の地域包括支援センター分室が地区に設けられる予定があり、連携を図りながら地域の高齢者福祉の拠点としての役割を期待される事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	66	職員は、生き生きと働いている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)		

[評価機関:特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会]

平成 30 年度

事業所名 : グループホームゆうゆう八木沢

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員で考えた理念をいつも心に留めておくよう、事業所の目につくところに掲示している。また、毎週月曜日の朝のミーティング時に唱和している。	開所当初の理念を見直し、平成28年に「歴史と尊厳、つながりを大切にして寄り添い、見守る」とした。イラストを加え親しみやすく掲示し、特に「尊厳」を重視し、「寄り添う」ケアに努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	地域のお祭りや婦人会主催の地域交流会に参加することで、利用者の顔と名前を覚えていただき声をかけてもらっている。近隣の保育所との行き来もある。自治会長をはじめ5名の地元の方が運営推進委員になってくれている。	毎月開催される地域婦人会主催「高齢者交流会」に参加しており、地域の一人暮らしの男性の参加を促すきっかけになった。柏餅の葉を近所の方にいただいた。事業所主催の「ゆうゆう祭り」は秋刀魚を焼き、近所の方が多数来所し交流が図られている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	今年度、初めて『ゆうゆうまつり』と称するイベントを開催し、利用者やそのご家族、地域の方に向けて認知症のケアを知ってもらうための寸劇とクイズを行った。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	身体拘束適正化委員の選出について相談したことがきっかけで「福祉について見識のある方」と候補が絞られた。事業所外の委員を保育所の所長をしている方をお願いすることになった。	委員は、自治会長・地権者・保育園長・民生委員・利用者・家族代表と多彩である。身体拘束適正化委員選出の助言や、災害時避難所の改善提言、行事への協力など活発な意見が出され、サービス向上に活かされている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	毎回、運営推進会議に出席いただいている。その際、事業所や地域住民の代表者の質問や意見に答えるなど、事業所や地域住民と共に、地域づくりを行っている。	運営推進会議に介護保険担当者も出席し、各種情報や助言を得ている。大雨で避難所に避難した際にも、親身に助言を頂いた。生活保護受給者がおりケースワーカーが来所し、市の担当者との連携は密である。	市の担当課との連携や、地域会議に参加し情報を得たり困難事例を話し合うことは、サービス向上に繋がる。当地域に来年度新たに地域包括支援センター(支所)が開所予定であり、積極的な協力関係の構築を期待したい。
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	今年度の介護保険の改正に伴い、身体拘束適正化委員会を設置し、研修を実施している。	外部委員(保育園長)を加えた身体拘束適正化委員会を設け指針を作成した。2ヵ月毎に委員会、兼研修会を行い、理解を深めている。重要事項説明書に身体拘束をしない旨を明記し、止むを得ない場合には、まず家族の同意を得ることとしている。	

[評価機関 : 特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内の虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待の定義について学びどんな些細な虐待も見過ごさないよう努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護に関する制度について行われる外部研修に積極的に参加する予定。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約は利用者と家族が同席し、不安や疑問点がないか確認したうえでやっている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の来訪時に「ご要望はありませんか」と聞くほか、投書箱を玄関に設置し、匿名でも意見や要望を伝えられるようにしている。また、運営推進会議に利用者や家族にも参加して頂き、意見や要望を頂戴している。	ホームでの様子は、写真入りの便りで毎月家族へ届け、面会等の家族来所時には意見・要望を伺う様に努めている。食事や水分摂取についての声が出され、看護職員と検討して利用者の実態に対応したより良いケアに繋げている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月1回の所内会議や、年に1回の職員と役員とで行う面談の際に、職員からの意見や提案を聞き事業の運営に活かしている	日々の申し送り、毎月の所内会議、年1回の役員との個人面談を通じ職員の意見・要望の把握に努めている。職員の意見により浴室の手すり設置とシャワーキャリー導入が図られた。資格取得希望や研修会参加希望には、最大限の対応を行っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年に1回、代表社員を含む役員と職員が面談し、就業環境について個別に話し合っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	2ヶ月に1回事業所内の研修があるほか、職員各々の経験年数やケアの力量に合わせた外部の研修に参加している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	岩手県グループホーム協会に入会し、会議や研修に出席している。今年度は3か所のグループホームを訪問し、情報交換を行った。代表者は同地域の地域密着型サービス事業者の運営推進委員を務めている。		
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	『その人の歴史と尊厳、つながりを大切にしてい寄り添い、見守ります』という介護理念のもと、本人の言葉に耳を傾けたり、言葉で表現できない利用者に関しては心身の状況を観察したりして本人の安心を確保している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービスの利用の前に見学に来ることを勧めている。その際や入居時に居室や浴室、トイレ等 事業所内を見ていただきながら、不安や要望を聞き、そのことに具体的に答えるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	平成27年11月以降新規の利用者はいなかった。 サービス導入時には本人、家族の他に前任のケアマネにも同席頂きカンファレンスを行い、サービス内容を検討する。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	モップ掛けや茶碗ふき、洗濯物たたみなど「それは私がやる」と利用者が自分の役割と行って行っている。職員が利用者に料理の作り方や材料を教えていただき、一緒につくこともある。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	毎月1回、事業所での本人の様子を伝える手紙を送っている。 通院の付き添いをお願いしたり、利用者の対応について家族に相談したりしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	友人や親戚との年賀状や暑中見舞いなどの手紙や電話のやり取りを継続できるように支援している。毎晩、娘さんに「おやすみなさい」の電話をかける利用者の、携帯電話の操作を手伝っている。	利用者本人や家族から聴き取った馴染みなどとの関係継続を支援している。地域婦人会主催の交流会や隣接のデイサービスに出向き、交流を図っている。家族と通院後、自宅付近をドライブし馴染みのコーヒー店やカラオケを楽しまれる方もいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	友人関係にある利用者や相性の悪い利用者などを把握し、食事の時の席やドライブの際の乗車位置を工夫している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	平成28年から、退所した方がいないが、今後サービス利用を終了する利用者がいた場合には、その状態に応じたフォローをしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	はっきりと要望や希望を話す利用者が多い。それを伝えることが困難な利用者の求めていることを考え思いやれる能力を身につけられるよう、所内で「ICFの視点」やアセスメントについての研修を行った。	多くの利用者は言葉で思いを表現できるが、難しい方は表情や仕草から汲み取るように努めている。毎月広報と一緒に担当職員が「ご家族への手紙」で利用者の様子を伝え、家族の感想・意見や利用者に関連する情報を得る様に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	仏壇や家族の写真など本人の馴染みのものを置いていただいている。また、利用者との会話の中から利用者の過ごしてきた環境や習慣を知り、それを崩さないよう配慮している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	1日2回のバイタルチェックと排泄や食事のチェック表で本人の身体の調子や排泄のリズムなどを確認している。ケース記録には午前、午後、夜間の過ごし方やその時の言動を記入している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者ごとに担当職員が決まっており、その職員と計画作成担当者が協力して、本人、家族の意向を確認し介護計画を作成している。毎月の所内会議にてケース検討の時間をもうけている。	ケアマネが担当職員等と毎月モニタリングし、毎月の所内会議でケース検討とカンファレンスを行っている。プランの見直しは3か月毎とし、医師や看護師の情報、家族の声を加味して計画を作成し、家族へ説明し同意を得ている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日、個別日誌を記入するほか、気づいたことはミーティングノートに記入し、職員間の情報共有を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	予定や計画にとらわれすぎず、利用者のその時々要望に臨機応変に対応することを心がけている。先日、お身内を亡くされた利用者(車いすを使用)が通夜や葬儀に参列する方法等を本人・家族と共に考えた。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地元の婦人会が主催する地域交流会に利用者と職員がかわるがわる毎月参加している。顔なじみになり、利用者が外に出た際には見守りにご協力いただいている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	どの利用者も入居前からのかかりつけ医を継続している。通院時には事業所のバイタルチェック表のコピーを主治医に渡し、日々の状態を伝えている。体調で気になることを、電話でかかりつけ医に相談している。	入居前からのかかりつけ医を利用し、通院は家族同行を原則としているが、半数以上は職員が同行している。毎週薬剤師が来所し利用者の様子や薬の種類や量について話し、必要な場合は担当医と相談するなど、医療連携が図られている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	ミーティングノートを看護師と共有し、介護職が気が付いたことを記入しておき、それについて処置した内容や対応の方法などを看護師が記入するようにしているほか、随時、お互いに報告と相談をしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	緊急時でもすぐに利用者の情報を医療機関に提供できるよう、利用者情報を作成している。 普段の通院時にも、当日を含む数日分のバイタルチェック表の写しを主治医に見ていただいている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時に当事業所では看取りを行うことを説明している。 終末期のあり方について、職員が本人や家族と話すことが出来る様、『看取り』についての研修会を実施した。	入居時に「医療連携体制・看取りに関する指針」により説明している。終末期には医師が説明し同意書を交わす事にしており、突然死事例はあったがこれまで看取りはない。訪問看護との連携は密だが、24時間対応の医療機関は少ない。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	全職員が新任研修時に、「普通救命講習」と「AEDを用いた心肺蘇生」の講習を受けている。その後も2～3年おきに講習を受け、実践力を身に付けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協体制を築いている	防災士の資格を取得している防火管理者を中心に、2ヶ月に1回、避難訓練を実施している。また、高台にある特別養護老人ホームと避難についての契約を締結している。	2ヵ月毎に火事・水害・地震を想定した避難訓練を行なっている。夜間想定訓練では屋外の暗さや寒さの課題が明らかとなった。今夏の大雨時には近くの小学校へ利用者全員が避難した。自動通報システムを導入し、職員にも通報される仕組みになっている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	家族の訪問時はプライバシーを保てるよう居室で本人と過ごしていただいている。入浴は個室となっている。排泄や入浴の介助や見守り、居室の訪問は利用者に声がけてから行っている。	理念で“尊厳”を重視し、人格を尊重する声かけに留意している。居室に入る際には「入っていいですか」と声がけし許可を得る様にしている。プライバシーを守るため、入浴やトイレ使用時はカーテンを用いている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員も一緒に食事をしたり、入浴時に話を聴いたり、希望や要望を話しやすい環境や時間を作っている。選挙に行く、買い物で食べたいものを選ぶなど、その方の能力に合わせた自己決定をしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	起床時間や就寝時間を特に定めず、本人のペースで過ごしている。 「〇〇に行きたい」「〇〇したい」等の希望には出来る限り対応するようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	認知症の進行によって意思決定が困難になっている方には、「これとこれ、どっちがいい？」と聞くなど、本人の能力に合わせ髪型や衣類を自分で選択するよう促している。外出時にはお化粧をしている方もいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立には利用者の希望を反映させている。ひつまみや小豆ぱっとう、魚汁などの郷土料理は、利用者を中心に作っている。	利用者は台所へ入り一緒に調理しており、男性職員が当番の際には、女性利用者が張り切って手伝う。駐車場横にホーム農園があり、カボチャ、ジャガイモなどを栽培し食材として利用している。利用者と職員が食卓を囲み、歓談しながらの楽しい食事となっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事や水分の摂取状況はチェック表を用いて確認している。 栄養士はいないが、一汁2菜の和食の基本にそった献立をたてることで栄養のバランスを取っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、歯磨きを促している。自分でできない利用者の歯磨きは職員が介助している。 毎晩、入れ歯洗浄剤を使用し消毒している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	失禁する前にトイレに行けるように、排泄のチェック表を確認し声掛けしている。 パットの交換もできるだけ自分で行うよう、声掛けと見守りを行っている。	排泄チェック表によりトイレ間隔を把握し、見守り・声掛け・誘導により全員がトイレで排泄している。布パンツ使用が2名、リハビリパンツが7名でパット使用の方もいる。夜間もトイレでの排泄を支援し、居室でのポータブルトイレ使用者はいない。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事と水分摂取ができていないか、排便があるかをチェック表で確認している。 排便の状態を医師に伝え、その人に合わせて便秘薬を処方してもらっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	年末年始やお盆等も含め、一日おきに入浴していただいている。 入浴の時間帯は「いつでもいい」とのこと。 冬至にはゆず湯、端午の節句には菖蒲湯に入っている。	開設当初は週3回だったが、風呂好きの方が殆んどであり、また腎盂炎罹患者が出てからは1日おきの入浴としている。季節に応じ菖蒲湯や柚子湯とし、菖蒲湯では「写真を撮って」との要望もあり、寛いだ楽しい時間となっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	全居室にベッドを備え、休みたい時に休めるようにしている。夜間に「怖い夢をみた、眠れない」と話し起きてくる利用者は夜勤者とお茶のみをしたり、昔ながらのおまじないをしたりして安心してから眠っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬情報をひとまとめにして、職員が一人ひとりの服薬状況とその効果と注意事項を確認できるようにしている。 服薬とバイタルチェック表を用いて、症状の変化を確認している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	「私は農家だった」という利用者に畑の指南役を務めて頂いたり、料理屋のおかみさんだった利用者に台所に入ってもらい料理をしたりしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気の良い日は散歩に誘っている。利用者の希望を聞いて、外食や買い物に出かけている。家族と共に外食やドライブに出かける利用者もいる。月に1回、2～3名の利用者が地域の婦人会主催の地域交流会に参加している。	散歩コースにお地藏さんやハーブ園、無人販売所があり、野菜や梅干しを買いながら楽しい外出となっている。季節に応じ花見や紅葉狩りにドライブし、買物や外食もしている。家族で外出される方も多く、毎月自宅に泊られる人もいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者のお金は事務室の金庫内にしまっているが、利用者から買いたいものがあるれば、その都度、職員が買って来たり、職員が付き添って買い物に行ったりしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者の希望時に電話をかける手伝いをしたり、手紙の代筆などを行っている。自分の携帯電話で娘さんに「おやすみ」と電話している方がおり、毎晩操作を手伝っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	1日に2回、温度と湿度を確認し、室温は23～25℃、湿度は40～60%になるよう、エアコンや加湿器を調整している。	食堂兼ホールは床暖房でエアコンと加湿器により快適な温度・湿度が保たれている。ホールから続くテラスは、日向ぼっこや昼食をしたり、散歩する地域の方が見える憩いの場となっている。浴室と脱衣場は広く、車椅子利用の方にも十分なスペースである。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居間のソファはゆったりしていて、いつの間にかそれぞれの指定席ができています。ソファ以外にもテーブルを2ヶ所に分けて配置しており、みんなで一緒に過ごしたり一人になったりできるようになっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ベッドとチェストは事業所で準備したが、それ以外は本人と家族が持ち込んでいる。仏壇や位牌を置いていたり、ぬいぐるみや好みの絵、家族の写真を飾ったり、それぞれの利用者らしい居室になっている。	ベッド・チェストが備えられ、エアコンと加湿器により快適な環境が整えられている。利用者は使い慣れた小家具や、思い出が籠る人形・写真・装飾品を持ち込んでいる。仏壇・位牌・遺影が置かれている居室もあり、居心地よく過ごせるよう工夫されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	段差がなく、居室の扉も軽い力で開閉できる 吊戸のため、車いすの利用者も自分で移動できている。自力で行こうとした所に行けるように、居室の入口にそれぞれ別の絵を貼り、トイレの場所を示す張り紙をしている。		